

「批評と礼節」をめぐる、少し考えたこと

すでに旧聞に属するのかもしれないが、短歌総合誌上で「短歌の読み」に発した論争があった。論争そのものが成り立ちにくい歌壇だが、今回もその土壌が露呈した、とあっていい。ただ、インターネット上一出版社のHPでの時評者が参入して、少しは問題提起が深まり、冷静さが取り戻せたのではないか、と思っている。

『短歌研究』(2001年1月号)の花山多佳子作品合評における佐佐木幸綱発言(資料1)を批判した『短歌』(3月号)の松村正直「歌壇時評」(2)をめぐる、佐佐木の反論(3)と松村の応酬(4)がある。(3)と(4)の間に青磁社HP「週刊時評」から大辻隆弘(5)と吉川宏志(6)が参入したことになる。成り行き上、上記論評の要旨は記さなければならない。このまとめ方も、また、論争の火種にもなりかねないのだが、関係個所をつとめて客観的に<資料>欄にまとめてみた。

正直なところ、私は、過剰反応にも思える(3)の佐佐木反論に驚いた。たしかに(2)にも不用意なところもあったかもしれない。しかし、たとえ、気に食わない、間違った論評であっても、あれほどまでに乱暴に、人格否定をもし兼ねない勢いで攻撃をする必要があったのだろうか。自分の息子のような年回りの者に、少し大人気ないのではという印象を持った。これまで、私の知る範囲の佐佐木論文や発言には、老いも若きも、物欲しげな歌人が多い中で、結社内での派閥争いや歌壇での上昇志向とは無縁なところに位置する余裕やおおらかさがあった。また、バランス感覚に優れ、状況判断も適確だったから説得力もあったように思う。今回のように、体育会系の部室で展開される先輩の後輩イジメの様相さえ呈したのは、読者には分からない、水面下で、何か「結社派閥的」なトラブルでもあったのだろうか、などと勘ぐってしまった。こんな習性が私にも身につけてしまったのか。

書評や論文でのエール交換、短歌賞にまつわる選考委員・受賞者・結社の持ち回りが当たり前の歌壇なので、論争はご法度と思っていた矢先の松村時評だったが、佐佐木反論の剣幕で、中身よりその態様に目が注がれてしまった感がある。健全な論争は、どうしたら生まれるのだろう。昨年、青磁社HP上の「週刊時評」での社会詠論争は興味深く読み続けた。京都でシンポジウムの運びにまでなったという。論争では応酬のテンポがかなりの要素になるかと思うので、こういう形も一つの方向性を示唆していよう。同時に、ネット上、メール上のやり取りは、一般的に双方熱しやすく、過激になりやすい欠点があることは十分承知しておいた方がいいかもしれない。これは、私の狭い体験からだが、地域の住民運動において、会議の代わりにメールでの意見交換を頻繁におこなうと、発言が先鋭になって、必要以上の摩擦がよく起る。顔を突合せての会議では、そこまで行かないで解決することも多いのだ。

私はかつて、拙著『短歌と天皇制』刊行の十年後に、著作のほんの一部分を切り取られた上で、理不尽な攻撃を受けたことがあった。相手が国文学界の第一人者ということで、私の反論は軽くいなされた、というより無視されたのだった。権威に弱い、他ジャンルからの発言を有り難がる歌壇では当然の成り行きだったのかもしれない。そんな苦い経験から、短歌についての、足元の歌壇における論争がより活発になることを願ってやまない。

<資料>

1) 佐佐木幸綱・来嶋靖生・間ルリ「作品季評」『短歌研究』2007年1月

・一車輻に乗り合はせたる運命の扉がひらきわれが降りゆく

(花山多佳子『木香薔薇』)

この一首の「一車輻に乗り合はせたる」がどの語にかかるか、について佐佐木と間で、「運命」「運命の扉」「扉」「車輻」「われ」なのかのやり取りのなかで佐佐木は「運命の扉」を示唆する。

・エレベーターとまちがへわが家の呼びリンを押す人がゐる年に二、三度
(同上)

佐佐木は、現実間違えて押す人はいないだろうから、「わざと嘘っぽい嘘をつけて」いるのではないか、と疑問を呈する。

2) 松村正直「歌壇時評・歌を読む姿勢」『短歌』2007年3月

花山作品二首の佐佐木の「読み」について、「読み以前」の問題として、一首にしっかりと向き合い、作品のよさを引き出そうとする「歌を読む姿勢」が伺えない、二首目の「嘘」は批評用語なのか？との疑問も呈する。

3) 佐佐木幸綱「批評と礼節—三月号歌壇時評『歌を読む姿勢』を読んで」『短歌』2007年4月

座談会の一部を引用するのはルール違反で非礼である。「エレベーター」評に関して、「批評用語」を振り回す批評など信用しない。言葉はたんなるツールではない。私の発言は子規の言が下敷きになっていることも知らないで・・・。「一車輻」評についても三通りの読みを掲げながら、「この松村という男は、佐佐木幸綱が花山多佳子の歌をけなしてけしからん、と読んでいる形跡がある。同じ『塔』会員として我慢ならないと感じて書いた」と述べる。李下に冠を正さず、のごとく「塔」以外の人の作品を例に出すべきで、結社派閥の弊害に腐心しながら先輩歌人が築いてきた現代短歌史に対する礼節でもある。「礼節こそ批評の根底ではないのか」

4) 松村正直『批評と礼節』に答える—佐佐木幸綱氏へ』『短歌』2007年5月

「エレベーター・・・」評が子規を踏まえた批評と分からない人は分からないでいい、という佐佐木氏の態度は「作品季評」にはふさわしくない。「一車輻・・・」評では、氏の「読み」を「作品季評」で明確におこなうべきだった。「読み」についての議論は、どちらの読み方が魅力的かは読者の判断にゆだねればいいことである。「結社派閥的」という批判については、まったく当たらず、「誰に阿ることなく、真っ直ぐに書くことを心がけている」

5) 大辻隆弘「非抑圧的対話状況」『青磁社ホームページ・週刊時評』2007年3月26日

『読み』の場を形成するには、自分の『読み』を絶対化せず、相対的に見つめる態度が当然必要だ。そこに『抑圧』『被抑圧』という権力関係が介在してはならないことは言うまでもない。佐佐木と松村は、このことをお互いによく知っているはずである」とし、その言を引用するが、佐佐木の「この男」「松村という男」「お前」呼ばわりする罵詈、松村の佐佐木の「歌を読む姿勢」を「読み以

前の問題」という短絡的、不用意な言葉での批判を、指摘する。佐佐木の喧嘩腰からは非抑圧的な対話状況は生まれない。今後、冷静な意見の交換が期待される。

6) 吉川宏志「ジャンルの危機一言論を封じないために」『青磁社ホームページ・週刊時評』2007年4月2日

佐佐木の俵万智への共感的な理解を例に、「結社派閥的」と一概に否定することはできない。「党派的」か否かはケースバイケースで、慎重に判断する必要がある。今回の佐佐木の「批評と礼節」という文章は、歌壇の代表的な人物が、考え方が違うからといって、公的な場において粗暴な言葉で他者を悪罵している状況は、新たな参入者に、非常に封建的な世界だという印象を与え、短歌というジャンル自体の危機を招いている。今回の事態も、考え方や価値観が異なる歌人たちのあいだで、どのように批評し合うか、理解し合うかが、現在大きな問題になっている。(内野光子、2007年6月12日記)